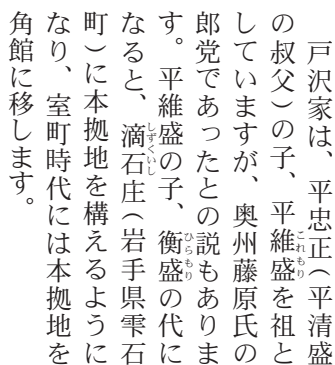


下馬場鹿島神社の棟札



父、盛安死去の際、六歳でしたので、盛安の弟、光盛が家督を継承しました。しかし、二年後、光盛は死去してしまいます。政盛は八歳で戸沢家の「主」となりました。天正二十年（一五九二）のことです。話しをもとに戻します。

『最上郡新庄古老覚書』によると、茨城郡下には、小河本郷、野田村、川戸村、世（与）沢村、こばなわ（小塙）村、いい岡村（飯前）、せらく（世楽）村、吉かけ（吉影）村上下、芝高村、生井沢村、秋葉村、芦黒村、鳥羽田村、持地村、下青柳村が領地であったと記載されています。

長十七年の棟札ですので、本来であれば、「政盛」であるはずですが、なぜか「安盛」となっています。

その後、元和八年（一六二二）、政盛は、新庄藩（山形県新庄市）六万石に加増され、領地替えとなります。そして、小川領七千石は、親藩である水戸藩に編入されま

前回、紹介した『小川稽医師の碑』に「慶長中戸澤右京亮政盛封焉政盛移封於手綱城之後即以其地益入我威公封域之中」と刻まれています。これは、水戸藩になる以前には、小川に戸沢政盛という「殿様がいたことを示しています。

政盛の父、盛安は「鬼九郎」の異名で名将と謳われ、東北地方の有力戦国大名の一人にのし上がります。そして、天正十八年（一五九〇）、豊臣秀吉の小田原征伐では、東北地方の大名の中でいち早く参陣しますが、陣中にて二十五歳の若さで亡くなつてしまします。政盛は嫡男でしたが、

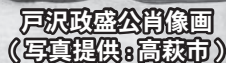
十九歳の時に小川城入城を果した政盛ですが、水の便が悪いとこの理由から、慶長十年（一六〇五）、多賀郡（高萩市）の竜子山城を改築する許可願を幕府に提出しました。翌年、改築が完成して、小川城から竜子山城に移り、城の名前を松岡城と改めました。

小川時代における政盛の足跡は、ほとんど残っていないが、下馬場鹿島神社の棟札に政盛の名が見受けられます。この棟札は、正年間に焼失した鹿島神社を再建した際のもので、年

す。小川城跡は、水戸藩の御殿として利用されたのち、水運を掌る小川運送方役所（寛永年間～一八〇三）、郷医の医学修練所である小川稽医館（一八〇四～一八六四）、小川小学校（一八七三）と変遷しているため、城館跡としての痕跡はほとんど残っていません。

(玉里史料館学芸員 本田信之)

慶長七年（一六〇二）五月、常陸を統一した佐竹義宣が出羽・秋田に国替えとなったのち、角館城主（秋田県仙北市）戸沢政盛は、常陸国多賀郡（高萩市）と茨城郡（旧小川町など）に四万石が与えられ、のちの常陸松岡藩主となりました。翌年六月、政盛は小川小学校周辺にあった小川城に入城します。



その後、政盛は、慶長十九年（一六一四）の大坂冬の陣では、松岡から出陣して小田原城に詰め守衛にあたり、翌年の大坂夏の陣では、江戸城を守衛しています。

小川領における戸沢氏の支配は、慶長八年（一六〇三）の元和八年（一六二二）の約二十年間ですが、慶長十年（一六〇五）までの４年間、本城を小川城に置きまし

た。本拠を松岡城に移した後は、小川領には、代官として小山壺岐と片岡奎之助もくのすけを駐在させました。『出羽国

郎兵衛盛経 戸沢勘兵衛清
重」とあります。政盛は、慶
長十四年（一六〇九）に「安
盛」から「政盛」と改名して、
從五位下右京亮に任官、譜代
大名に列せられています。慶

